

ハビトゥス変異とシグナリングのダーウィニアン社会学・序説

方言変異・変な流行・ハビトゥス論懐疑から、パスワード改訂仮説・
 パラサイトシグナリングへの暗黙のご了解モデルへ。あるいは、
 「ジェンダーバイアス」の指弾はいつ高まるか？

桜 井 芳 生

【はじめに】

現代ダーウィニアン生物学が、社会学さらには広く人文・社会科学全般にもたらしうるインパクトを、進展させる作業を、筆者は最近おこなっている。社会学をはじめとする人文・社会科学は、過去一世紀ほどにおいて、自然科学における「モデル（考え方）」を自己の領域に応用することについては、ある程度熱心であったようだ。しかし、そもそもヒトはどのような属性をもったエージェントなのか、という点においては、少数の例外を除いては、自然科学の成果に直接依拠するアプローチは少なかったと感じられる。

過去一世紀の人文・社会科学の多くがこのような傾向をもっていたこと自体、ダーウィニズム生物学をはじめとする自然科学的人間理解によって、説明することが近々可能になると、私は予感する。自然科学の圧倒的な成功にたいする劣等意識、他方において、そうでありながらも、人文・社会科学を自然科学には還元したくない・人間を他の生物と同等に扱いたくない、といったいわゆるバイオフィビア（生物学的視点の嫌悪）、おそらくこの両者があいまって、このような傾向が生じたと、感じられる。筆者自身、社会学者をまえにして、自分の「ダーウィン生物学の成果に依拠した、ダーウィニアン社会学」の構想をかたると、ほとんどつねに、「モデル（考え方）」の部分において進化論的発想を利用した進化ゲーム論のようなアプローチですね、と「誤解」されてしまう。

筆者がめざす「ダーウィニアン社会学」とは、そうではなく、人間の属性に

ついて、ダーウィン生物学をはじめとする自然科学的認識を直接援用しようとする、社会学である。

このようなアプローチを指向する理由・利点はいくつかある。ここではとくに、以下の一つの理由を強調してみたい。

すなわち、いままで、人文・社会諸科学において、暗黙にあるいは明示的にきづかれていた諸現象のうちで、相互にほとんど関係がないとおもわれていた諸現象について、このアプローチは、非常に蓋然性の強い関連をしめしてくれることが多い、という理由である。

本稿では、そのうち、方言（とくに、方言の変異）、若者などに見られる「変な流行」、ブルデューが論じた「ハビトゥスによる暗黙的選抜」論、さらには、情報の経済学で論じられる「シグナリング」、などが、相互に非常につよい通底性をもつことをみてるつもりである（「パスワード改訂」仮説）。

そして、以上のように「すでに見いだされている諸現象」相互に関連をつけるだけではなく、さらには、この視点を「応用」して、「パラサイト・シグナリング」モデルといった社会をみるうえでの新たな視点の提案を試みてみたい。

【現代ダーウィニズムの一つとしての、ダンバーの「方言変異」論】

本稿で、筆者が依拠したい現代ダーウィニズムとは、第一に、ロビン・ダンバーのいわば「方言変異」論である。方言について、世の人の前でかたると、往々にして「現代においては、さまざまな方言が消滅の危機に瀕していて、、、」とかいった反応が返ってくることが多い。しかし、ある科学的視点からすると、そもそも、方言というものが存在するという事実こそが説明を要する「謎」であるようにみえてくる。なぜなら、言語というものは、その言語を使用する人が多ければ多いほど、その利用者各人にとって便宜が増大するという性質をもっているからだ（ネットワーク外部性）。だとすれば、人類が言語を使用しはじめてこれほど長い歴史がすぎているのに、これほど、多くの言語（方言）が存在しているということはとても不思議なことにみえてくるだろう。

このような謎にたいして、ロビン・ダンバーが、おもしろいことをいって

る。

「方言にはもう一つの長所がある。少なくとも世代という尺度からみれば、比較的短期間のうちに変化することができるのだ。移住した群れは、一世代くらい経つと、同じ言葉を使っているけど話し方やアクセントを変化させている。オーストラリア移住者のほとんどが過去二〇〇年の間にそこへ移ったという事実にもかかわらず、オーストラリア人と英国人のアクセントが現在どれほど異なっているか、考えてみよう。そうすると、明らかに提唱できるのは、方言はフリーライダー問題に対処するための適応形態だということだ。群れは新しい話し方、まったく同じことがらに関する新しい言い方を絶えず開発することによって、その一員を確実にたやすく見分けられるようにしている。」

(Dunbar 1996=1998)

彼ダンバーは、現代ダーウィニストの一人であるので、ハミルトン流の血縁的距離に近いもの同士の相互協力が存在しうることをみとめる。しかし、血縁的近親者による相互協力には、よそ者がうちわ者を装って入り込んで、協力されることの「利得」のみを得る、という「ただ乗り（フリーライダー）」問題が生じてしまう。このフリーライダー問題への対処戦略の一つとして、方言変異が進化したのではないかとダンバーは考えるわけである。

【現代日本若者における、変な流行、と、受けない化粧】

本稿が第二に依拠する現代ダーウィニズムは、ジュディス・リッチ・ハリスの「グループ・ソーシャライゼーション」理論である (Harris 1998=2000)。彼女は、親が子供に大きな文化的な影響を与えるという常識に反対し、仲間集団による影響が子どもの社会化には大きな力を持っていると主張する。彼女は言う。

「文化を改変できるのは十代後半から二十代前半で独自集団をもつ人々だ。集団性により、親や教師の世代とは一線を画したいという気持ちが駆り立てられる。自分たちは一世代前とは違った存在でありたいという気持ちがあまりに強いため、両者の違いは改善する方向へ向かうとは限らない。実際、改善では

ない場合がほとんどだ。彼らは違う行動、違う思想を受け入れ、新語を造語し、斬新なファッションも生み出す。さらにこれらの行動、思想などを携えたまま成人になる。彼らは自分の子どもに差別化を図る新たな方法を生み出すという重圧を残すのだ。ママとパパはマリファナを吸っていたらいい。嫌だ嫌だ、私たちは別のものを吸いましょう！」(Harris 1998=2000)。すなわち、子どもや若者においては、仲間集団への準拠が大きく、仲間集団への準拠をおこなうために、その集団の外部と無理にでも差別化をおこなう傾向があるというのである。

【仲間集団準拠と「パスワード改訂」仮説】

以上の、ハリスの「仲間集団影響説」と、ダンバーの、「よそ者峻別マーカー」としての「方言変異」説とを、総合して、たとえば若者文化について、以下のように仮説をたてることができるのではないだろうか。

すなわち、若者は同世代の仲間集団の影響を強くうけるのだが、「なかま／そとま」の峻別マーカーとして、「変な流行、や、ファッション」を無意識に「利用」している、と。筆者は、別のところで、昨今の日本の若い女性の「化粧」現象について分析したことがある。とくに「男受けしない化粧」、とりわけ「おじさん受けしない化粧」について、分析したことがある。そこでの主旨は、男うけ（特に、おじさん受け）しない化粧とは、この現象の一例ではないかということであった。「変な流行」としては、たとえば「キャップ（野球帽）のつばをわざとななめにしてかぶる」「パンツ（ズボン）の片足だけたくしあげる」などがあげられる。

このような現象が、「なかま／そとま」マーカーとしてはたらくためには、「予想もできないような方向に変化」しなければならない。（そうでないと、「外部者」峻別としてつかえない）。

いわば、これらの現象は、「パスワード」の改訂になぞらえることができるのではないだろうか。パスワードはまさに、あるメンバーシップをもつ者であるか否かを峻別するフィルタリング機能を担っている。しかし、パスワードは、

改訂しないでずっとおなじものを使いつづけていると、やがてはなにかの拍子に第三者へと漏洩してしまう。よって、パスワードはある程度以上の頻度で改訂しなければならない。しかし、この改訂の方向は、第三者にとって予想のつくような方向では、パスワードの機能を果たさない。

まさに、これと同様に、化粧や変な流行や方言は、第三者が予期しえないような方向に一定程度以上の速度で、変異しつづけねば、フィルタリングの機能をはたさないのだろう（パスワード改訂仮説）。

【ブルデュー・バビトゥス論への一疑問から、方言圏論へ】

以上のような視点は、有名なブルデューのハビトゥス（習慣）による選抜論への、ある一つの疑問にたいして、かなり答えてくれると思われる。

ピエール・ブルデューの一連の社会学的試みについては、いまではかなり有名となった。彼ブルデューの真意が那邊にあったかは、かなり研究されつつあるといえる。しかし、ブルデューの問題意識とはとりあえず独立に、彼が提起した概念装置・仮説の意義を検討する作業はあまりなされていないように感じられる。

とくに、彼が提起したいわゆるハビトゥスによる選抜理論の、意義と問題点（その理論があらたに提起してしまう疑問点ならびにそれへの回答）は、ブルデュー自身の問題意識と独立に、探求されているとはいいがたい、とおもう。

われわれの問題意識にふれあうかぎりにおいて、ブルデューのハビトゥスによる選抜論の骨子は以下ようになる。すなわち、

ヒトは、幼児期の社会階層の高低におうじて、階層特有のハビトゥス（習慣）を（親などから）無意識に習得する。そして、若年・成年に進んでいく際に、タテマエにおいては学力などで選抜すべき入学試験などにおいて、このバビトゥスの差異によって、ヒトは高い階層へのチャンスの多寡へと選抜されてしまう。その結果、全体を客観的にみると、金持ちの子が、金持ちの子であるがゆえに金持ちにふさわしい身のこなし（ハビトゥス）をみにつけ、そのおかげで金持ちになりやすい学校などに進学でき、やがては金持ちになった、すなわち、階層

的再生産が生じた、だけであった。のに、当事者の視点からは、「勉強したから、あるいは、生まれつき頭よかったから」いい学校に入れて金持ちになれた、と事態が「正当化」されてしまう、わけである（文化資本の無自覚的相続による、社会階層の誤認的再生産）。

このモデルは、非常に興味ぶかい。しかし、素朴な疑問を喚起してしまう。なぜ、貧乏人は、いつまでも、自分の子孫をふたたび貧乏にしてしまうような、貧乏人ハビトゥスの相続を継続しているのだろうか？、と。

この疑問は、ブルデューの視点からは容易に解かれてしまうようにみえるかもしれない。すなわち、たしかに、貧乏人が自分の子どもに貧乏人ハビトゥスを相続させるは不利な行為だ。が、まさに自覚されず無意識にそうしてしまっているのだ、と。

たしかに、無意識・無自覚性がこのメカニズムにおいて効いていることについては、みとめるのに筆者もやぶさかではない。しかし、無意識性もちだすだけで、この疑問が全く払拭されてしまうとも思えない。なぜなら、ヒトをふくむ動物の行動はほとんどは無意識・無自覚におこなわれている。そうでありながらも、少なくとも平均的長期的には、各個体は自分の不利なるようなことは回避し、自分の有利になるようなことを選択する能力をもっているとおもわれるからだ（もし、そのような能力をもっていなかったら、彼の遺伝子は、進化史のなかで、サバイバルしなかつただろう）。

というわけで、上の疑問はいまだ残存することとなる。われわれとしては、すぐのちに「合流」するが、さしあたり「二手に分かれる、二本の流れ」によって、この疑問へ回答を提起してみたい。すなわち、第一が上述の「パスワード改訂現象」であり、第二が「限界費用の差異を利用したシグナリングメカニズム」である。

【ハビトゥスによる選抜においてもパスワード改訂現象は生じているのではないか（仮説）】

第一の流れとして、ハビトゥスによる選抜においても、パスワード改訂現象

がしようじているのではないかとわれわれとしては推測（仮説）してみたい。こう考えることで、上述のハビトゥスによる選抜の謎（の少なくとも一部）が解かれる、とおもわれる。説明しよう。

もしハビトゥスによる選抜が、あるハビトゥスをもっている者たちに有利に・他のハビトゥスをもっている者たちに不利に、なるのだとしたら、たとえ無意識であっても、長期的には、下位ハビトゥス保持者たちも上位ハビトゥスを習得してしまう蓋然性がある（高い）だろう。それにたいするいわば対抗方略として、上位ハビトゥス自体が「変異」して、いわば下位ハビトゥス保持者による「追っかけ」を「ふりきる」メカニズムが進化したのではないかと考えてみたいのである。まさに、パスワード改訂メカニズムがここにも、生じているのではないかと。

ブルデューが直接あつかった論件について、この仮説を支持する知見が存在するかどうかは知らない。しかし、われわれ日本人には、この仮説を支持すると思われる知見・現象が身近に存在する。すなわち、柳田國男が見いだした方言周圏現象である（柳田1930）。

【方言周圏現象】

周知のように、方言周圏現象とは、かたつむりなどの方言が、細長い日本列島において縞模様上に、すなわち（もし列島が細長くなかったと仮想すると）同心円状に分布しているという現象である。

そして、この方言の分布は、文化的中心地（すなわち、都）から、辺境にむけてある語の普及が伝播していったとみなされる。

とすると、（言語という）階層的ハビトゥスをめぐって、ここにおいてパスワード改訂現象が生じていたと推測できる蓋然性が高いのではないだろうか。

すなわち、文化的下位者たちは、文化的上位者たちのハビトゥス（ここでは言語）を、「追っかけ」的に習得したのだろう。しかし、その一方で、文化的上位者たちは、下位者たちの追撃（追っかけ）をふりきるように、新ハビトゥス（ここでは言語）を改訂していったのではないかと。言語は、比較的観察しや

すいハビトゥスであるとおもう。がゆえに、ここではとくに言語をめぐる、パスワード改訂現象・その結果としての周囲現象、が観察されている。しかし、それはじつはとくに言語にとどまらず多くの種類のハビトゥスにおいても平行して生じていたと私は見通している（もし、この「見通し」に対応する新事実が観察されれば、この視点の信憑性はなお増すだろう。どなたか、もしおこころあたりのある現象をご存じならご教示いただきたい）。

【「ベンツ」的シグナリング・メカニズム】

ここで、一見すると上記とはすこしことになっているかのように見える視点から、ハビトゥスによる選抜論への疑問を再考してみよう。

上では、例の暗黙の選抜過程において、上位階級のハビトゥス（育ちの良さを示すような習慣）が優遇されるのなら、なぜ、たとえ無意識であっても、下位階級の者もそのハビトゥスを習得しないのか、と疑問点を提示した。

この疑問には、じつは、素朴な回答がありうるだろう。すなわち、下位階級の者（貧乏人）には、上位階級のハビトゥス（「上品」な習慣）を、習得するだけの「余裕がない」から、というものである。たとえば、「クラシック音楽、や、美術への、嗜好」によって、「お里が知れて」しまう事例を想起してみよう。

この回答は、じつはかなり正鵠を射ているとおもわれる。そして、上記のパスワード改訂仮説と通底し、さらにまたそれを包含するものであるとおもわれる。説明しよう。

まず、すぐ上でのべた、「貧乏人には、金持ちハビトゥスを習得する余裕がない」という点が、情報経済学における「シグナリング」理論（Spence 1973）の典型的な実例（ケース）となっていることを確認しよう。

「余裕がない」と直観的にのべたが、厳密には、コスト（Cph）をかけて金持ちハビトゥス（rh）を習得しても、それに見合うだけのベネフィット（Bph）をえられず、ペイしない、ということである。

他方それにたいして、金持ちの方は、親が同様なハビトゥスをもっている、

とか、もともと金持ちなので習得（に、たとえ貧乏人と同じ金額がかかったとしても）のさいの貨幣の限界負効用が少ない、と仮して、コスト（Crh）が相対的に貧乏人ほどかからない。あるいは、貧乏人をふりきることのベネフィット（Brh）が大きい。こうして、都合、ベネフィットとコストの差し引きがペイする、ということである。

すなわち、あるハビトゥス（h）が、シグナリング（このばあいには、フィルタリング）として機能しうるための、必要条件は、そのハビトゥスを習得することによる金持ちのベネフィット、コストを、それぞれ、Brh、Crh、と、あらかし、同じく貧乏人のベネフィット、コストを、それぞれ、Bph、Cph、とあらかしと、

$Cph - Bph > 0$ かつ

$Brh - Crh > 0$

と、なることである。

【シグナリングメカニズムとしてのパスワード改訂】

いうまでもないが、上記のシグナリングメカニズムをもたらず「ネタ」はなんでもいい。上記の二不等式をみたすものなら、なんでもよい。クラシック音楽や美術への嗜好の大小、あるいは、お茶・お花への通曉の深淺、さらには、（入試にはつかえないが）持っている車（ベンツ?!）や服装の値段など、つかえるものはさまざまだろう。

しかし、いうまでもなく、このシグナリングメカニズムは、（上位者階層にとっても）コストがかかってしまう。これは、上位者もコストをかけることで、下位者との一種の「がまんくらべ」をして、下位者をふりきるメカニズムであるからだ。

というわけで、この（とくに上位者階層にとっての）コストがすくなければすくないほど、「性能の良い」シグナリングツールであるといえるだろう。

と、ここまでいえば、上述の「パスワード改訂」が、このような意味で比較的「性能の良い」（上位者にとってコストの低い）シグナリングツールであるといえるということはもはやいうまでもないだろう。

なにしろ、言語（とくに母語）には、習得上の臨界期が存在する。臨界期まえに、習得してしまえば、臨界期後にそれを「まねよう」としても、多大なコストがかかる。ただし、まったく変化させないでおけば、長期的には（何代もかければ）「まね」されてしまうかもしれない。よって、「うちわ」のものにだけわかるような仕方で「改訂」しておく。そもそも、言語の体系は恣意的なものなので、この改訂は「行き届き」プロセスさえしっかり確保しておけば、比較的低いコストで可能となる、だろう。

【パラサイト・シグナリングモデル、へむけて】

さて、以上のように、現代ダーウィニズムから導出されたパスワード改訂仮説を、情報の経済学におけるシグナリング理論と接合させてみた。こうすることによってさらに、とくにすぐ上で触れたブルデューが論じた論件を再び想起することで、少しく興味深い視点を新たに提起できるように思う。いわば、「パラサイト・シグナリング」モデル、である。説明しよう。

ブルデューのハビトゥスによる選抜論において典型的にあつかわれるケースは、入試である。しかし、シグナリング理論をご存じの読者にはいうまでないことだが、入試自身がそもそも、シグナリングの働きを持つものとして、機能しているのである。（以下数段落は、シグナリング理論が既知の読者はとばしてください）。

ここに、能力が、「高」と「低」の二種類の学生がいたとしよう。学生は自分の能力の程度を知っているが、彼らを採用しようとする会社の方にはその情報が見えない、としよう（情報の非対称性）。

ここで会社側は、彼らを採用するさいに、「学歴」をシグナリングとして利用することが考えられる。ここでの眼目は二点ある。第一は、この学歴（教育）は、それ自体はなんら生産性の向上をもたらさなくていい、ということである。

第二は、以下の帰結が生じるためには、その当該の教育（学歴）を獲得する限界費用が、能力「低」の学生の場合よりも、能力「高」の学生の方が、低くなっているということが必要条件となっているということである。

いちばん、わかりやすい例としては、受験勉強にコスト（てまひま）がかかる「入試」をシグナリングにすればいい。ただし、その入試は、能力「高」の学生には比較して（限界的に）低いコストで、能力「低」の学生には比較的（限界的に）高いコストで、はじめて点数がのびるようなものであることが必要である。

このような前提条件（必要条件）のもとであるので、「いい会社」に入れる／入れない、にしても、「能力の高い学生には、合格のための受験勉強のコストを控除しても、なおその会社には入れることがペイし」、かつ、「能力の低い学生には、合格のための受験勉強のコストを控除すると、その会社にはいってもペイしない」ような、「ちょうどよい合格水準」を設定することが可能になる。

このように、入試というものは、かなり本来の機能のレベルで、もともとシグナリング機能を担っていた（場合が多い）といえそうである。

ところが、もともと（?）、このように受験生の本来の能力を測りとるために設計されているはずの入試が、ブルデューの事例においては受験生の別の属性（上では、階層に相関するハビトゥス）を「ふるいわける」というはたらき「をも」してしまったのである。

このように、「本来の」属性峻別の機能として設計されたシグナリングツールが、べつの属性の峻別をもしてしまうということは、意外に多いように直観される。

このような「もともと開示させたい本来の、非対称情報」だけでなく、その峻別のいわば「副作用」として、「べつの非対称情報」をも峻別してしまう現象を、パラサイト・シグナリング現象（寄生シグナリング現象）と呼んでみよう。

このようなパラサイト・シグナリング現象は、この他にも、社会のさまざまな領域で生起しているように直観される。われわれのアプローチの今後の課題

の一つとして、このようなパラサイト・シグナリング現象を、さまざまなままで気づかれていなかった論件において、発見することを目指したいとおもう。

また、それを関連したもう一つの課題がありうる。すなわち、いわゆるメカニズム・デザインの課題である。

通常情報の経済学において、メカニズムデザインというと、秘匿されている非対称情報を、誘因にそくした構造を設計することで、開示させ、より望ましい社会メカニズムをデザインする課題として考えられているだろう。

われわれの議論からは、それと非常に類似しているが厳密には若干ことなる課題を意識化することが可能になる、だろう。

すなわち、多くの場合、シグナリングメカニズムは、設計者が望む（非対称）情報のみならず、当事者の別の属性に即したふるい分け（フィルタリング）として機能してしまう（とわれわれは予想する）。いかなるメカニズムをデザインすることによって、望む属性によるフィルタリングをしつつ望まない属性によるフィルタリングを働かせないか、という課題である。

【二重（多重）シグナリングに対する、暗黙のご了解】

以上のような視点を、さらにうがってかんがえると、さらに以下のようなシナリオをも構想してみることが可能になるとおもう。いわば、「暗黙の、二重のご了解」現象である。あるいは、「タテマエ、と、ホンネ、との出来レース」モデルである。説明しよう。

すなわち、まず第一に、このような「パラサイト・シグナリング」現象がしょじっているがゆえに、上位階層は、このメカニズムを支持（すくなくとも受容）していた、のではないかということである（「第一の」（一重の）暗黙のご了解）。

すなわち、なぜ、社会的な力をもっている上位階層がこのような「公平な」（そうであるがゆえに、絶対的に有利な自分のポジションにたいして相対的に不利な）メカニズムを受容しているのか。さまざまな理由がありうるだろうが、その大きな一つは、上記のパラサイト・シグナリングメカニズムによって、結果的に自分たちに有利な帰結がもたらされるからだ、とかんがえることができ

るだろう。(第一の、暗黙のご了解)。

ただし、この点は、すでに、ブルデューが、外見上の中立性・公平性がなぜ呼び込まれるのかについて論述していることで、實際上すでにのべられていたと解釈しうるかもしれない。

筆者としては、さらに「うがった」仮説をたててみたい。すなわち、すべての場合ではないにせよかなり多くの場合において、上記のような入試シグナリングのもつ、二重の機能(表のシグナリング、と、裏のシグナリング)を、じつは下位階層も無意識には了解しているのではないか、ということである。そして、相対的劣位者との優位者との「暗黙の交渉」によって、「名目ともに、とられるよりはマシ」として、いわば「名を取って、実をゆずっている」のではないか、ということである。

すなわち、「表の、「公平な」シグナリング」と「裏の、「優位者に有利な」シグナリング」の併存を、優位者と劣位者との、暗黙の合意、ないし、暗黙の妥協、いわば「手打ちの結果」として解釈してみたいのである。

こうして、「二重の、暗黙のご了解」として、二重のシグナリングメカニズムの社会的受容を解釈しうるのではないか、とかがてみたいのである。

この第二の点は、ブルデューの視点とはかなり異なった視点(というか、まさに正反対の視点)であるように感じられる。がゆえに、これがすべての場合でないにせよ成立しているとする、本アプローチは、ブルデューの論圏の圏外へと脱したといいうるだろう。が、いうまでもなく、この後者の仮説の実証は容易ではない。しかし、すくなくともある一つの場合には、ブルデュー的仮説とわれわれの仮説は、そこから予測される帰結を異にし、そうであるがゆえに、「実証的決着」がつけうる、と思われる。すなわち,,,,,

【社会変動期における、「あらかじめ約束されていた、暴露】

すなわち、ある種の社会変動期の場合において、である。筆者は、暗黙の二重のご了解を仮説した。すなわち、劣位者は、所与の状況のもとで、ないよりましな一種の「妥協」として、「名目的には公平な(多くの場合は、たんに名

目的に公平であるだけでなく、実質上の「成り上がり」も「ある程度において」可能であろう)しかし「実質的・暗黙的には、優位者有利」な、「二重シグナリングの組み合わせ」を受容(許容)していたのであった。

しかし、状況が変化すれば、劣位者によるこのような暗黙のシグナリングメカニズムの受容が、「公然化」する蓋然性・誘因が生じるだろう。いうまでもなく、劣位者たちが、優位者たちとのこのような社会関係から離脱するチャンスをもちはじめたとき、である。

すなわち、「今(これまで)よりも、もっとヨリましな、選択肢」を劣位者が持つことによって、はじめて、劣位者たちは今までの関係を「虐げられていた」「不公平な」ものとして指弾する誘因をもつことになる、だろう。もし、このようなヨリましな選択肢がなかった場合、現状を、不公正なものとして指弾したとしても、みずからの自覚のもとでその不公正な関係に甘んずる以外にかれらに道はない。

ここから、ブルデュー的仮定をとる場合、と、われわれのような仮定をとる場合での、「実証可能な差異」を導出することができるだろう。

すなわち、もしわれわれの仮説がただしければ、「劣位者の境遇が好転」したばあいに、いままでの選抜過程は、不公正であったという指弾が増大するだろう。

それにたいして、もしブルデューの仮説がただしければ、いままではソんな選抜過程であったのに、外見上の公正性にめくらましされていたのだが、より劣位者の境遇が悪化した場合に、それまでは閾値内であったがゆえに気づかれなかった自らの不利を感知し、不公正な選抜過程への指弾が生起するだろう。

このように、このようなケースに照準することで、われわれの仮説とブルデュー的仮説との「実証的決着」が可能になる、だろう。

【「ジェンダーバイアス」の指弾は、いつ高まる、か？】

さらに、上記のような「素朴ブルデュー主義的仮説との訣別を可能にする分別可能な実証」の一スペシャルケース(特殊事例)として、いわゆる「ジェン

ダーバイアス」に関するちょっと非・常識的な検証仮説をたててみるのも、興味深いとおもう。

昨今のジェンダー論的文化分析・社会分析・テキスト分析の興隆についてはいうまでないだろう。これらには、さまざまなものがあるだろうが、強引に単純化してしまえば、もっともありがちなパターンのひとつは次のようなものだろう。

すなわち、いままでジェンダー（社会的性差）とは無関係ないし中立とみなされていた（というか正確には、なにもみなされていなかった）ような文化的・社会的事象や諸テキストが、じつは、ジェンダー的にバイアスのかかったものであった、ということ暴露する、というものだろう。

これにたいしても、われわれの仮說的視点としては、これらの事象ならびにそれらに対するジェンダーバイアスとしての指弾それ自体（もちろんすべてではないが）を、例の「暗黙のご了解」ならびに「そのお役ご免による崩壊（約束された暴露）」として解釈するのである。

すなわち、当のジェンダーバイアスのかかった（つまり性別によって有利不利のある）文化的・社会的事象を、上で述べてきた「二重のシグナリング」ツールとして解釈するわけである。「タテマエ上」はジェンダーに中立な（たとえば）能力主義的なふるい分け機能と、「暗黙の」ジェンダーふるい分け機能、という「オモテとウラの二重機能」をもったものと解釈するわけである。

そして、ジェンダー的な不利者たちも、多くの場合、このような「オモテとウラの二重機能」を暗黙で了解していた（オモテの中立的ふるい分けがあるだけ、「それさえもない、よりは、マシ」だから）。と、解釈するわけである。

注意しておくが、筆者は、なにも、ここでの言及にあたる事象が「すべて」、このように不利者によって暗黙に「ご了解」されていた、とは主張しない。しかし、すくなくらず、このように暗黙に了解されていたのではないかと仮説するのである。

もし、このような視点がどれほどであったにせよ、正鵠を射ていたとすると、そうでないとかんがえる対抗仮説に対して、実証的に決着可能な予測を導出す

ることができるだろう。すなわち、

〔予測〕他の変数が同等であるとする、ジェンダー的な不利者の境遇が「好転」すればするほど、それまでジェンダー的に中立であったとされる文化的・社会的事象にたいして、「ジェンダーバイアスである」とする指弾、がなされる蓋然性がたかまるだろう、と。

【おわりに】

本稿は、現代ダーウィニズム、とくに、ダンバー的「方言変異」論が、人文社会諸科学にどのような洞察と通底性を与えてくれるかを、示そうとした。その結果、いろいろなトピックに浅く広くふれることになってしまった。この点、試論的な序説という本稿の位置づけからして、ある程度仕方がなかったかとおもう。とはいえ、読者にはいささか読みにくいペーパーとなってしまったかもしれない。今後は、ここで提起した個々の論点をさらに精緻に理論化し、実証へと接続させたい。

文 献

- Bourdieu, Pierre, 1979. *La distinction: critique sociale du jugement* = 石井洋二郎訳. 1989. 『ディスタンクシオン：社会的判断力批判』. 新評論
- Bourdieu, Pierre, Passeron, Jean Claude, 1970. *La reproduction: elements pour une theorie du systeme d'enseignement* = 宮島喬訳. 1991. 『再生産：教育・社会・文化』藤原書店
- Dunbar, R. I. M., 1996. *Grooming, gossip and the evolution of language* = 松浦俊輔, 服部清美訳. 1998. 『ことばの起源：猿の毛づくろい, 人のゴシップ』. 青土社
- Harris, Judith Rich, 1998. *The nurture assumption: why children turn out the way they do* = 石田理恵訳. 2000. 『子育ての大誤解：子どもの性格を決定するものは何か』. 早川書房
- Spence, A Michael, 1973. "Job Market Signaling," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 87 (3) pp. 355-74
- 柳田國男. 1930. 『蝸牛考』. 刀江書院